



## 2. 菅沢遺跡B区

B区は便宜上B1区とB2区にわけて、発掘調査を進めた（第22図）。標高97～103mの丘陵頂上部に近い緩斜面や谷部の地形である。

**B1区** B1区の土層堆積状況は次のようにある。表土層の下に赤褐色土が堆積する（第29図の1・4層）が、この部分が調査区北辺に所在した道路1埋土にあたり、埋土の中から近世以降の磁器類が出土した。なお、西側市道神主山線に近い部分については表土の中に碎石・コンクリート廃棄物が大量に存在しており、堆積がごく最近であることがうかがわれる。この下に地山との判別の難しい黄褐色土の堆積があり（第29図の3・4層・5層）、これが道路2の埋土と考えられる。また、調査区は赤褐色の地山が全体的にぶい黄褐色土（第29図の9層）に覆われていたが、地山が土壤化土である可能性もあり、B1区については全面的にこの鈍い黄褐色土を掘削した。但し、出土遺物は石器の可能性のある石1点に留まり、このにぶい黄褐色土下で確認された遺構の部分（SX03他）も、人為的なものではないと判断された。

道路1 調査区北辺で長さ23m、幅1.0～2.0mを検出した。但し道路の北辺側は調査区外であり、完全な道幅は不明である。一部に側溝状の施設を検出した他、黒色土を含み、硬化した路面（第24図）を検出している（第29図の3層）。遺物は上述のように埋土中から近代以降の磁器が出土しており、比較的、最近まで使われていた道であると考えられる。遺物中で最古のものは中世末～近世初頭の陶器である。

道路2 道路1の下層で検出した掘り方で、規模などは道路1と同じである。地山に掘りこまれており、硬化した路面は検出できなかったが、道路1より先行すると考えられる。上限は不明であるが、中世～古代に遡る可能性のある道路である。構造上は両者に大きな差はなく連続して使用されていたものと考えられる。

SX03（第30図）にぶい褐色土層の下層で検出した。埋土はまだら状に暗褐色土が存在しており。境界が不鮮明である。出土遺物もなく、木の根・倒木の痕跡などであろうか。なお、SX01～04はいずれも同様なもので、最終的に全て人為的なものではないと判断した。

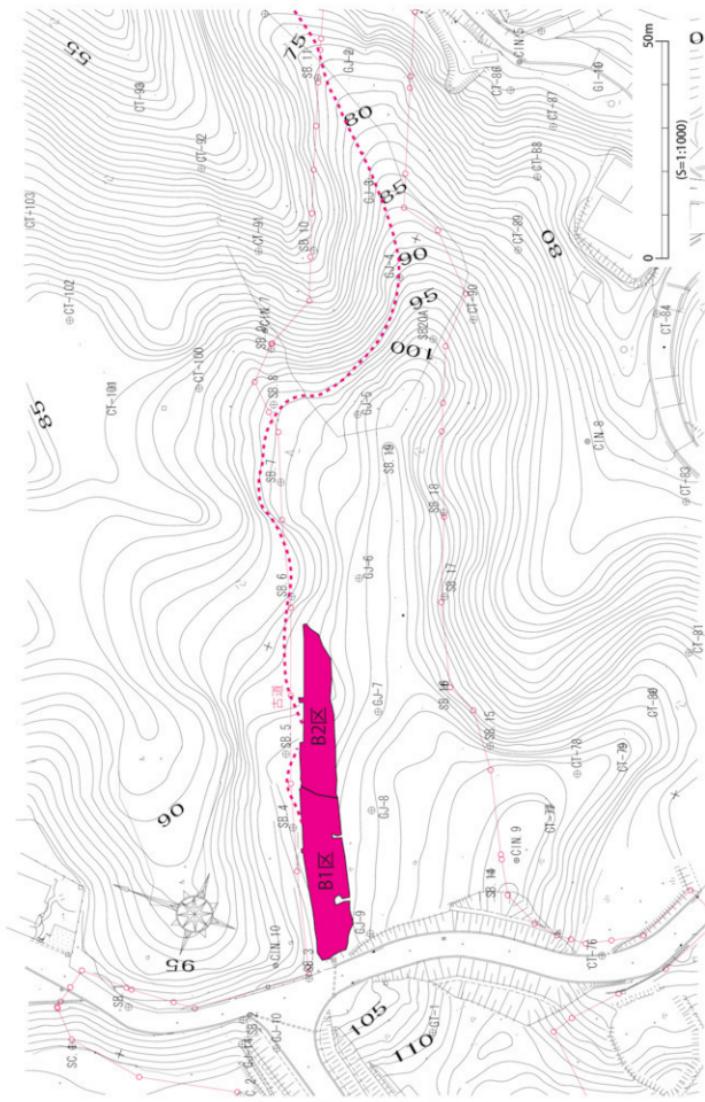
**B2区** 調査区の東側にあたり、緩いカーブを描いて北側に抜ける幅6～7mの谷状地形を呈していた。比較的緩斜面であること、調査区外では道路として東に続いており、そこでは明らかな掘削による幅員の確保がみられたため、古代道痕跡の可能性がある（第31,32図）。

b土層全体の堆積状況は、さらに西側・東側で異なっている。西側では表土下にB1区からの道路の痕跡がみられ、その下には皿状にぶい黄褐色土が堆積していた（第26図）。明確な掘り方は確認できず、結論的には自然の谷状地形の堆積物と判断、古代道は確認できなかった。このにぶい黄褐色土中からは、若干の弥生土器が出土した。

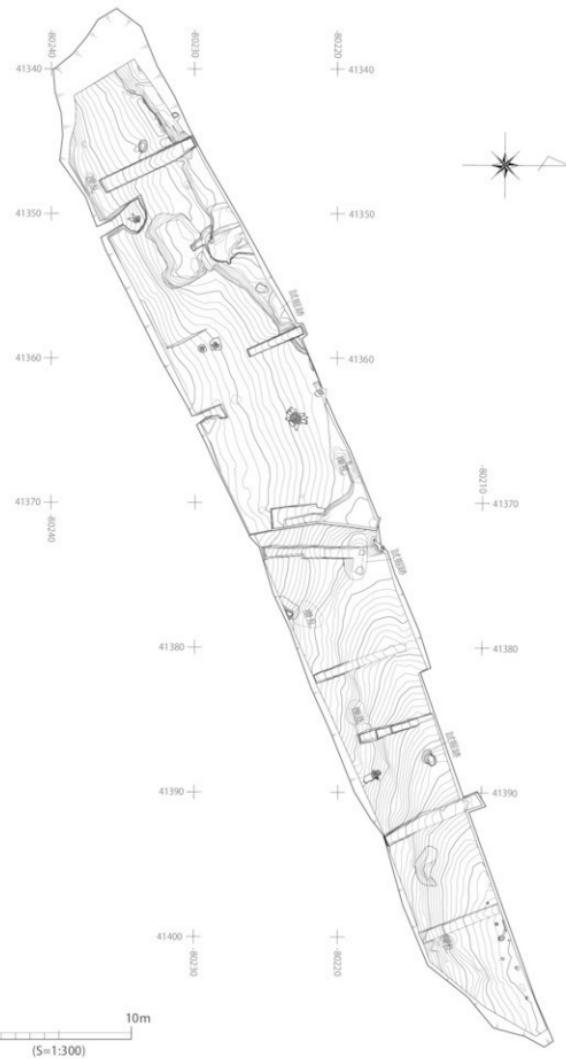
b東側の谷がカーブする部分は、にぶい黄褐色土の下に旧表土とみられる黒褐色土が存在、黄褐色土と互層状をなし三面を確認できた（第27図）。このうち、上層から加工段1とピット、中層から溝状遺構とピット、下層からもピットを検出した。

遺物は黒褐色土中から縄文後期～弥生前期にかけての土器が出土しており、上記の遺構の年代もこのころと推定される。

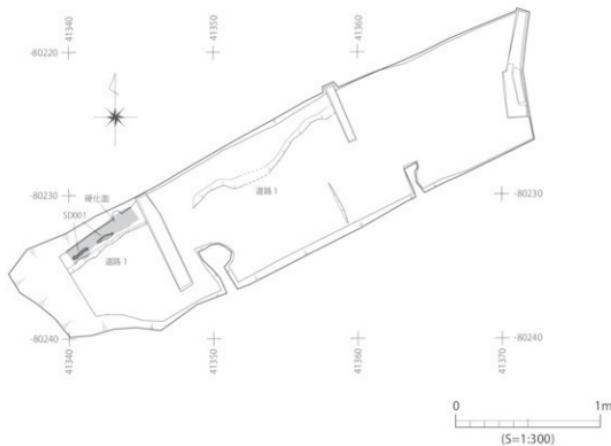
（平石 充・内田律雄）



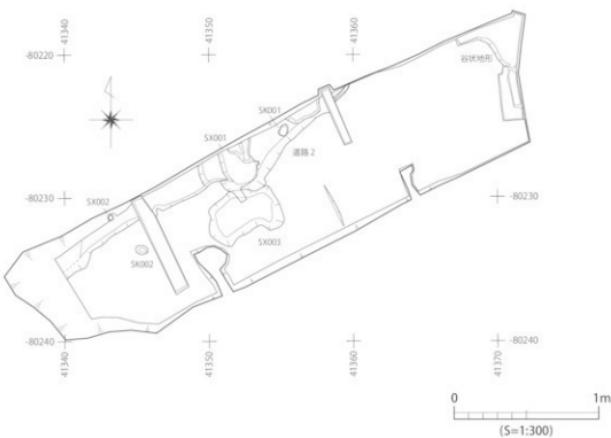
第22図 菅沢B区調査区位置図



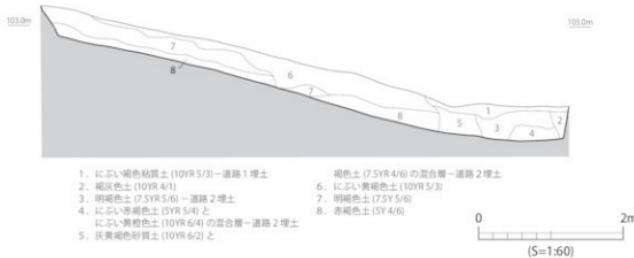
第23図 管沢B区調査区完掘状況



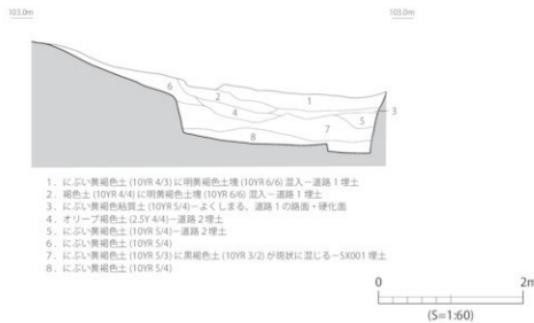
第 24 図 菅沢遺跡 B1 区上層遺構図



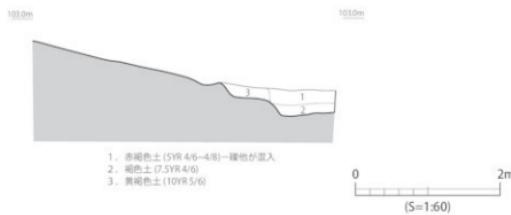
第 25 図 菅沢遺跡 B1 区下層遺構図



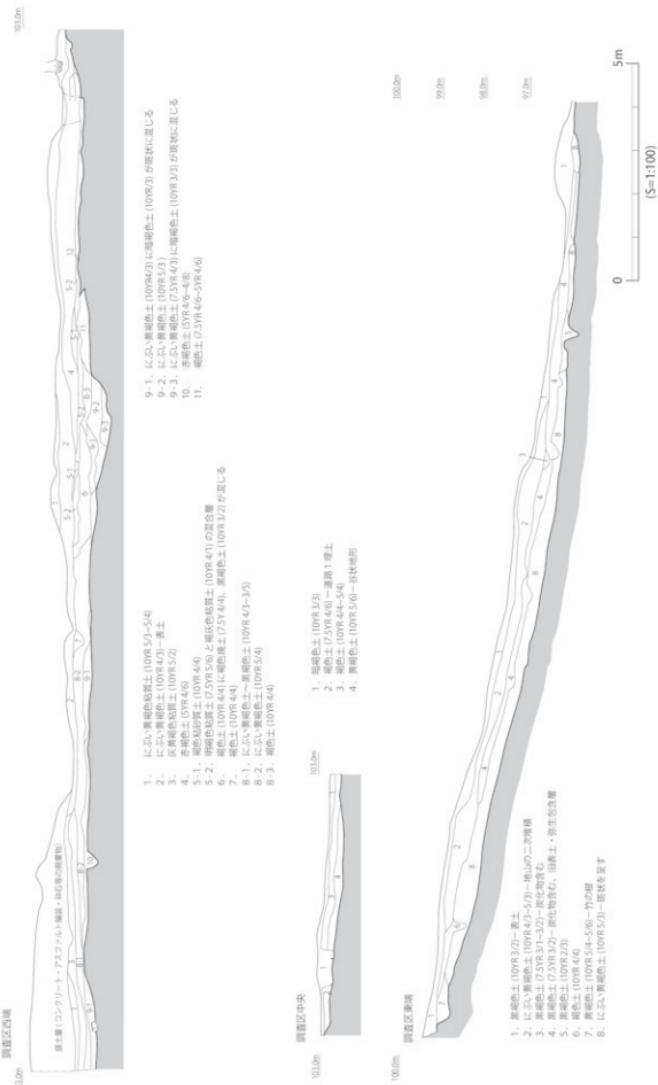
第 26 図 菅沢遺跡 B1 区南北土層図 2 (西側)



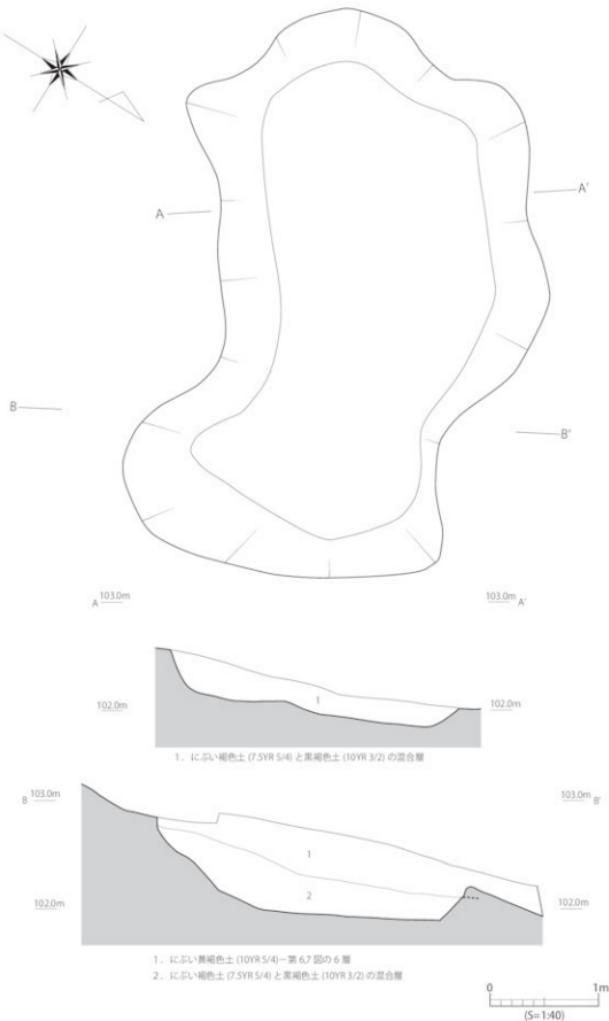
第 27 図 菅沢遺跡 B1 区南北土層図 2 (東側)



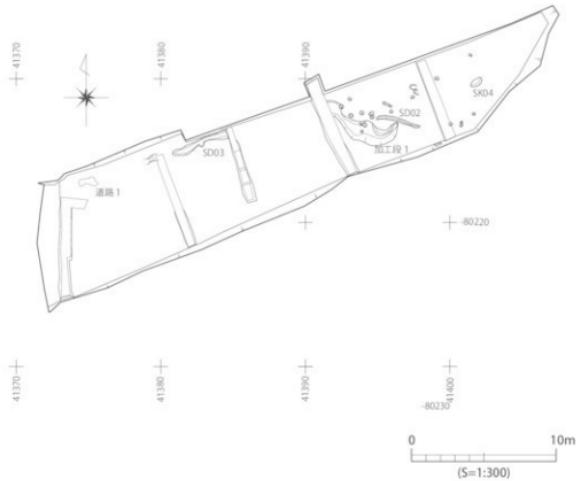
第 28 図 菅沢遺跡 B 区 SP04 土層図



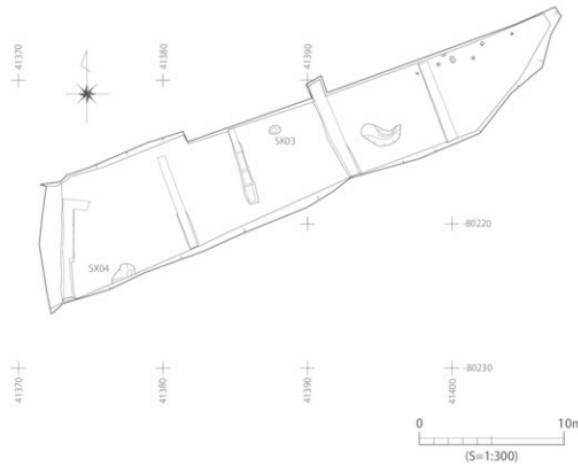
第29図 菅沢遺跡B区北壁土層図3



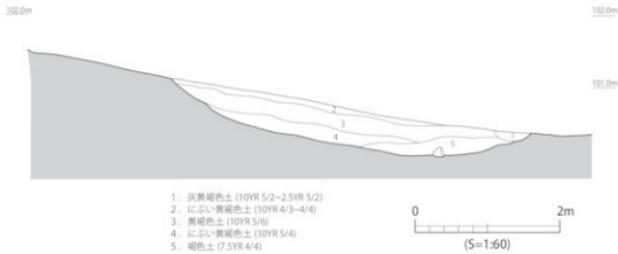
第30図 菅沢遺跡B1区 SX03 実測図



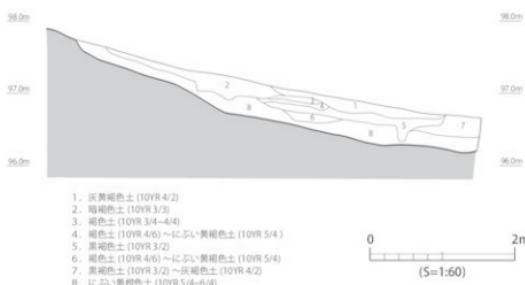
第 31 図 菅沢遺跡 B2 区上層遺構図



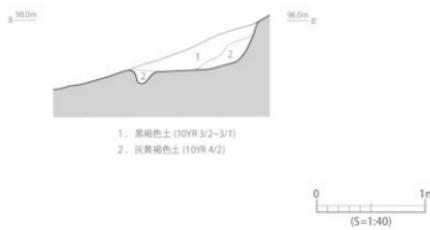
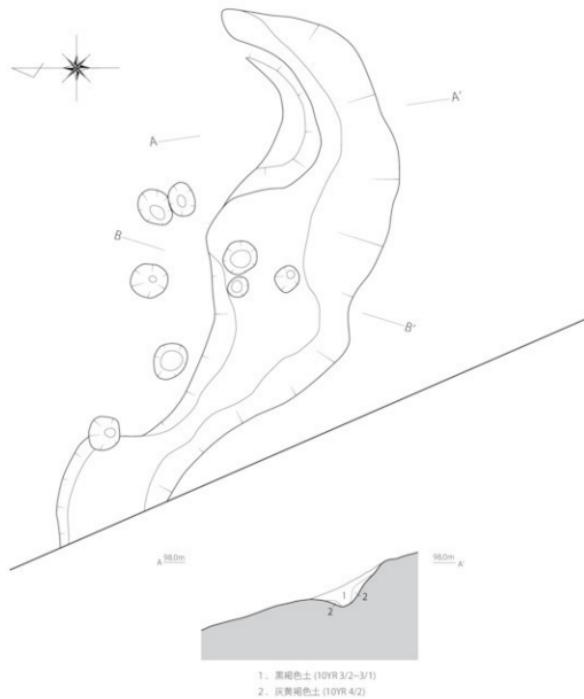
第 32 図 菅沢遺跡 B2 区下層遺構図



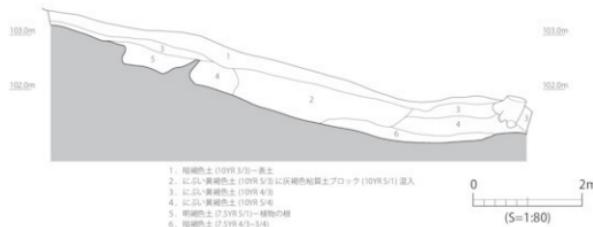
第33図 菅沢遺跡B2区南北土層図1（西側）



第34図 菅沢遺跡B2区南北土層図2（東側）



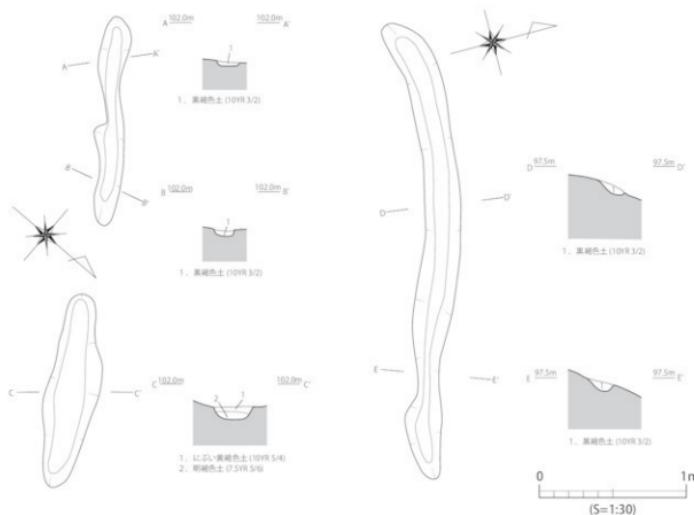
第35図 菅沢遺跡B2区加工段1実測図



第36図 菅沢遺跡B区南北土層図A

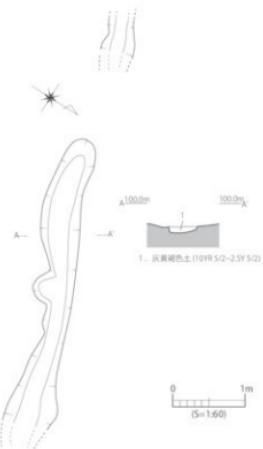


第37図 菅沢遺跡B区南北土層図B

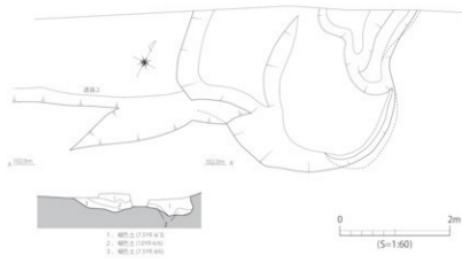


第38図 菅沢遺跡B区SD01実測図

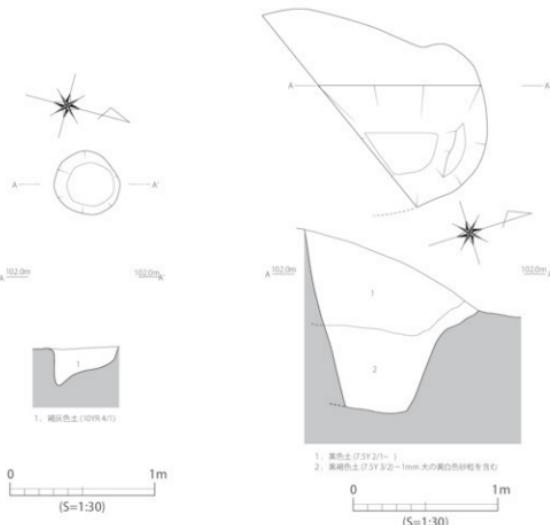
第39図 菅沢遺跡B区SD02実測図



第40図 菅沢遺跡B区SD03 実測図



第41図 菅沢遺跡B1区SX01 実測図



第42図 菅沢遺跡B1区SX02実測図

第43図 菅沢遺跡B区SX04土層図

1. 黒色土 (73Y 2/1- )  
2. 黒褐色土 (73Y 3/2- ) 1mmの黄白色砂粒を含む  
0 1m (S=1:30)

#### B調査区包含層出土遺物

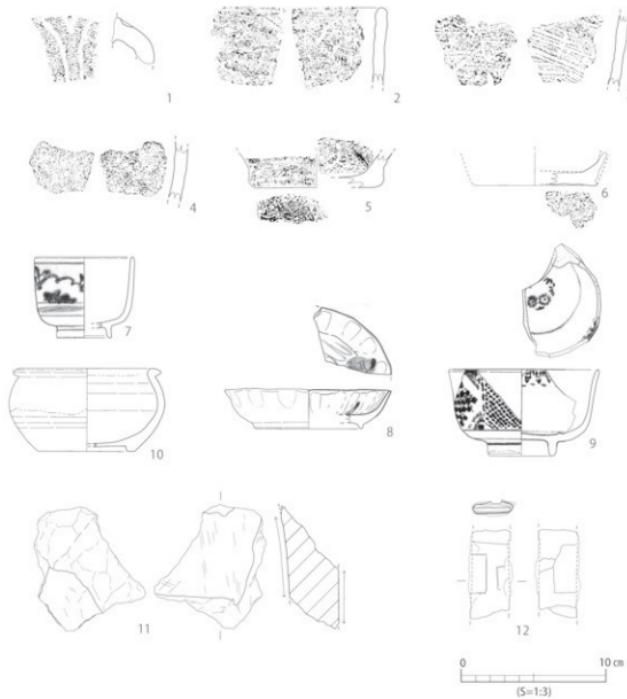
図44-1～6は縄文時代後期の土器とみられる。1はB2区IV層から出土した橋状把手。中央部にV字状の沈線文を施し、その両脇に把手の形状に沿った沈線文を施す。器面調整はナデである。成立期縄帯文期のものか。2はB2区III層から出土した無文土器の口縁部片。内外面ともにナデ調整で、口縁端部は丸くおさめる。3、4は無文土器の胴部片である。このうち、3はB2区のIV層出土。内外面ともに二枚貝条痕調整である。4はB2区のIII層から出土。内外面ともにナデ調整である。5、6はB2区のIII層出土の底部片。いずれも内外面ともにナデ調整であり、平底である。7は試掘TR（トレンチ）15の表土から出土。肥前系の湯飲み碗（筒丸形染付磁器碗）である。外面に雪輪文が染付され、推定される年代は19世紀前葉から中葉頃とみられる。8はB1区からの出土。肥前系の輪花形染付磁器皿である。口縁端部は口錫がめぐり、見込に網干文がみられ、浜景を絵付けしたものとみられる。推定される年代は19世紀前半代。9はB1区表土から出土した端反形染付磁器碗で、顔料は科学コバルトである。型紙刷区割り文様が施文される明治印判手である。見込に目跡がみられる。胎土は灰白色を呈しており産地は不明。1890年代～1900年代頃まで操業されていた地方窯とみられる。10はB1区表土から出土した胴丸形の陶器甕。体部に来待釉が施釉され、在地系とみられる。11はB2区II層から出土した凝灰岩製の砥石。器長18.6cm、器幅8.27cm、器厚4.2cm、重量207.84 gを測る。片面に使用面がみられる。12はB2区から出土した器種不明の鉄製品。器長6.1cm、器幅2.6cm、器厚0.4cm、重量30.74 gを測る。



まとめ B1 区、及び B2 区の一部で、近世～近代ころの道を確認したほか、B2 区で縄文後期～弥生前期の遺物が出土、加工段・ピットなどを確認した。後者は加工段の存在などから集落の一部と想定される。

多伎町内で縄文土器の出土は知られていたものの、発掘調査事例は少なく、詳細は不明であった。今回の調査によって丘陵頂上に近い場所に人々の居住時期があったことが確認できたことが大きな成果である。

(渡辺 晴)



第 44 図 菅沢 B 区出土遺物実測図